攻撃性をともなう依存者へのケア

――自閉症児の母親トルーディ事例の検討――

小西　真理子

1　はじめに

二〇〇九年一月二九日、アメリカのケント州立大学教授、トルーディ・シュトイアナーゲルが自閉症の息子スカイ・アボット・ウォーカーに暴行され、自宅で瀕死の状態で発見された。トルーディは八日後に亡くなった。トルーディは六〇歳、スカイは一八歳だった。トルーディは政治学を専門とする研究者で、当時ほとんど研究されていなかった自閉症政策分野のパイオニア的存在だった。息子のスカイは、母親であるトルーディに度々暴力をふるっていた。それにもかかわらず、シングルマザーだったトルーディはスカイと二人で暮らし、最後には息子に殺害されてしまったのだった。この大学教授の母親と攻撃性をともなう自閉症の息子の事件は、トルーディが亡くなった翌日の二〇〇九年二月七日に、オハイオ州の新聞『プレーン・ディーラー』に掲載された。この記事では、ケント州立大学教授のトルーディが自閉症の息子に暴行されて死亡したこと、その息子が母親の殺人容疑と補佐官への暴行容疑で逮捕されたことが報じられた（Sangiacomo 2009）。

トルーディは生前に、スカイの暴力によって致命傷を負わされる可能性を見込んで、以下のような手紙を残していた。

この手紙の封が開けられ、読まれているということは、私が息子のスカイ・ウォーカーによって深刻な傷害を負わされたか、殺されてしまったということでしょう。私は心からスカイを愛していますし、スカイが故意に私を傷つけたわけではないと信じています。私は彼を助けるために、そして、この家に生じている暴力のパターンを終わらせるために最善を尽くしてきました。精一杯やってきましたが、それは十分ではなかったのだと思います。それは私のせいであり、スカイのせいではありません。多くの人が暴力のことを知っていますし、多くの人に目撃されています。私たちはみな、スカイを助けることに失敗したのです。私は、彼に責任のない行動によって、彼が罰せられることを望んでいません。

トルーディ・シュトイアナーゲル（Connors 2009）

はじめの記事からおよそ一〇か月後の二〇〇九年一二月二日、『プレーン・ディーラー』はトルーディとスカイの事件にかんする詳細な記事を発表し、トルーディが残した手紙を公開した。事件当初、トルーディの家族は、第三者にその手紙を公開しないという決断を下していた。スカイの弁護士たちは、この手紙が自閉症の偏見を助長し、トルーディの印象を悪くしてしまうと言っていた（ibid.）。

しかし、この事件が報道されることで、自閉症者のなかには攻撃性を有する者がいることが暴露されることになった。おそらく自閉症のス

ティグマ化を避けるために、それまでこの傾向性について積極的に公開されてこなかった。トルーディの親戚を含み、多くの人びとが自閉症者の攻撃性についてほとんど聞いたことがなかったのである。作家のアン・バウアーは、トルーディとスカイの事件に触発されて、二〇〇九年三月六日に「私の息子のなかのモンスター」というエッセイをウェブ上に掲載した。バウアーは、自閉症の息子の暴力に苦しんだ経験と、息子を施設に収容することを決めた苦渋の決断について記すことで、不可視化されている自閉症者の家庭内暴力に対する沈黙を破るように訴えかけた（Bauer 2009）。オンライン上では、多くの両親たちが彼女に同調した。一方で、この記事は、自閉症者を暴力的な「モンスター」と表現しており、乏しいデータによって自閉症者への偏見を助長させるものだと非難されてもいる（Simplican 2015, p.218）。

さらに、なぜトルーディはスカイを施設に預けることで、自らの身を守らなかったのかという批判が突き付けられた。多くの人は、「なぜ賢く、有能な女性が、自身の安全を犠牲にしてまで息子を家においておいたのかという困惑」（Connors 2009）を抱くこととなった。メディアでは、スカイの暴力行為を非難する人に加えて、他の人の助けを借りずにスカイをケアしようとしたトルーディの判断に対して巧妙な仕方で疑問が投げかけられた（Allen 2017, p.68）。

このようにトルーディとスカイの事件をはじめ、それに類似する事件は、自閉症者の依存問題の責任を「モンスター息子（monstrous son）」と病的な「悪い母親（bad mother）」に押しつける傾向にある（ibid., p.64）。母親のケア提供を補うためのより良い公的資源の必要性を指摘するものもいくつか見られたが、それより頻繁に、そのような事件をつうじて人びとは、単に自閉症、母性、またはその両方を病理化したのである（ibid., p.69）。[①] スカイは明らかに多くの記事で自閉症のモンスターだと表現されることになったため、二〇〇九年のCBSニュースにて、家族や近親者は、スカイは彼の母親を愛しており、誤って彼女を殺したと強調した（ibid., p.68）。

事件のおよそ一〇カ月後、家族はトルーディの手紙を公開しないという決断を改めた。取材においてトルーディの弟のビルは、「私は姉をよく知っています。……トルーディはこの手紙を読ませるつもりだったんです」と述べ、トルーディの言葉に集中し、涙をながし、つまりながら、声に出してその手紙を読んだ（Connors 2009）。

本論文では、トルーディの手紙が意味するところのものにできる限りせまりたい。トルーディを「悪い母親」や「ケアの失敗者」と判断し、そのような視点から彼女を解釈して問題提起するのではなく、トルーディの奮闘とその記述から見えてくる彼女が伝えようとした問題を浮かび上がらせたい。

トルーディ事例を丁寧に扱った論考として、この論文でも何度も参照しているステイシー・シンプリカンとホーリー・アレンの研究がある（Simplican 2015, Allen 2017）。まず、シンプリカンの論文と本論文の最大の違いは、このような事件に対して、シンプリカンが複数性の視点の導入を推奨しているのに対し、本論文はあくまで単数性の視点に特権を与えていることである。つまり、シンプリカンは、トルーディだけでなく、他の家族・近親者を含む複数の他者の見解を聞くことによって、「愛の経験に特権を与え、攻撃性や関係的な不和といった特性を無視するケアを与える判断に生じる理想化の衝動を一掃する」（Simplican 2015, p.228）ような支援に希望を見いだしているのに対し、本論文では、そのような複数性の視点は、極端で複雑な事例においては、トルーディのように異端視されやすい見解を結果として見えなくしてしまうと考え、あえてトルーディの視点に特権をもたせるという単数性の見方を強調する。さら

に、アレンの論文も含め、トルーディ事例に言及するにあたって、明らかにスカイとの経験を前提として執筆されたトルーディの論文に触れたものは見当たらなかった。[2] しかしながら、トルディーの論文は自閉症政策の新たな視点を提供するという意味ではなく、トルディーのような声が社会の根本的変革を要請するものであることを可視化する大変重要なものである。

2　トルーディ事例

2-1　『プレーン・ディーラー』

トルーディの手紙がいつ書かれたのかは誰も知らない。二〇〇八年の春に元夫のスコット・ウォーカーにトルーディは手紙を読み上げて、亡くなるまで金庫に保管していた。

一九九〇年一一月九日、スカイ・アボット・ウォーカーはトルーディとスコットの息子として生まれた。スカイは九カ月で歩いた。一〇カ月で単語が言えるようになり、アルファベットを理解し、文字が読めるようになった。一歳になる前には数字を学び、足したり引いたり数えたりできるようになった。しかし、そこでスカイの発達は止まった。スカイは自閉症だろうと医師に言われても、トルーディとスコットはなかなか認めることができなかった。しかし、年齢が上がるにつれ、二人はスカイが自閉症だと認めざるをえなくなった。

四歳のころには、特別支援学校の先生からスカイには攻撃性の問題があると伝えられた。トルーディとスコットは、その攻撃性が子どもとしての症状なのか、それとも自閉症の症状なのか思い悩んだ。スカイが五、六歳の頃、スカイが遊んでいる別室から、何かが落ちたか壊れたかのような大きな衝撃音が聞こえた。二人が部屋に行くと、そこには制御不可能なほどに泣きじゃくっているスカイがいた。「何があったの、スカイ?」「何か困っていることがあるの?」二人はたずねた。スカイは泣きじゃくり、体をうねらせ、話そうともがいていた。やっとのことでスカイは、「ぼく。言葉をもっていない。」と言った。スカイが小学生になったとき、トルーディとスコットは、学術的にも社会的にもよりよい環境と思われる通常学級でスカイが過ごすための支援を得るために、ケント州の公立学校システムと戦った。スカイが通常学級で過ごすためには、フルタイムの補佐が必要だった。

二〇〇三年一〇月、もうすぐ一三歳になろうとするスカイの攻撃性が問題になり、学校は二時間早く彼を帰宅させるようになった。この学期に、トルーディの親密な友達の一人であるアイリーン・バーネットは、スカイが母親を傷つけていることに気がついた。「トルーディは私に何か話すことを禁じました」とアイリーンは言った。「もしトルーディの望みを尊重しなければ、私たちの友情が終わるだろうということは分かっていました。彼女の忠誠心は一〇〇%スカイへと向けられていました」。トルーディはアイリーンにスカイはよい医療ケアを受けていて、医者は向精神薬を試していると伝えた。アイリーンは以下のように述べている。

> トルーディは、いつの日かよい薬の組み合わせが発見され、スカイのホルモンの急上昇が抑制され、攻撃性がおさまるのだと信じていました。……彼女はスカイをどの施設にも入れたくなかったんです。彼女は施設には多くの虐待があり、スカイは言葉を持たないために簡単に被害者になってしまうと言っていました。

アイリーンの他に、数人の友達や家族メンバーが、トルーディの打ち身

や目の周りのあざを目撃していた。それについてたずねても、トルーディは「水泳で頭をぶつけたの」などと弁明した。さらに、スコットはトルーディに居住施設を検討するように強く勧めていたが、その話をするとトルーディは口を閉ざしてしまうのだった。トルーディの父親は関連施設に勤めていた。マリーベス、トルーディ、ビルの三人の子どもたちは、一九六〇年代の夏にティーンエイジャーとしてそこで働いたことがあった。トルーディの施設に対する否定的な見解は、その経験から形成されたのではないかとビルは考えている。

二〇〇四年、スカイが一四歳のとき、スコットは家庭医療の実習のためにウィスコンシン州の小さな町に引っ越した。二年後の二〇〇六年、トルーディとスコットは離婚した。トルーディは特別なニーズをもつ子どものシングルマザーとなったのである。トルーディはスカイの日々の細かなルーティンを成立させるためのサポートに全力を尽くし、何とか生活を成り立たせようとしていた。

二〇〇八年三月二七日にトルーディは、スカイの暴力が深刻化したため、ケント州立大学の学生新聞『ケント・ステイター』にエッセイを掲載した。

ここ数年のスカイとの生活は私たち二人にとってとても孤立したものでした。……スカイが学校にいるわずかな時間のなかで、授業で教えたり、家庭を切り盛りしたり、すべてを調整したりしようとすることで、私の生活は圧迫されています。悪い日には、この数時間が、数分になり得るのです。私は身体的にも感情的にも誰ともいっしょにいないので、誰とも友達になれませんでした。私は自分たちがどれほど忙しいかと言ってくる善良でまともな同僚たちに我慢なりませんでした。忙しい？　クローゼットのドアに背を向けてそのなかに座って夕方を過ごしてみなさいよ、あなたの子どもがドアを蹴り破ろうとしているあいだ、そのドアが開かないように押さえてみてごらんなさいよ。

同僚たちは困惑したが、誰にも何もできなかったと学部長は言った。ケント州立大学の教員のモリー・メリーマンは、トルーディが受けているのはＤＶであると納得させようとしたが、トルーディは依然としてスカイが変わることを信じていたと述べている。二〇〇八年五月には、スカイの暴力は学校が警察を呼ぶほどに凶悪なものになっていた。警察官が、車のバックシートでスカイがトルーディを暴行しているところを目撃したこともあった。二〇〇八年六月、スコットとその新しい家族と過ごしているときに、スカイの攻撃性が爆発した。スカイは家具や鏡を壊し、スコットにも襲い掛かった。アチバン薬でスカイを鎮静化させ、翌朝にスコットはスカイを大学病院の自閉症ユニットに連れていき、スカイのための居住施設がないかたずねた。病院はクリーブランドにある攻撃性をともなう自閉症成人の経験のある施設を勧めたが、トルーディはスコットと見解を異にし、怒ってスカイを病院から連れて帰ってしまった。

その年のサンクスギビングの日、トルーディはビルにスカイの暴力を打ち明けたが、それでも「何とかできるわ」と言っていた。しかし、クリスマスのころ、トルーディが助けを必要としていると感じたビルは、トルーディをたずねた。スカイはクリスマスまで精神状態がよかったが、クリスマスプレゼントをもらい過ぎたことをきっかけにルーティンが大きく崩れ、スカイの状態は悪くなった。ビルが暴力について再度言及し、危険ではないかとたずねたが、トルーディは「大丈夫」と答えて話を変えてしまった。そして、その翌月の二〇〇九年一月二九日、スカイに暴

行されたトルーディは瀕死の状態で発見された。トルーディはスカイをケアし続けることができないと分かっていたため、スカイの住む場所を探してもいたというが、トルーディにはその場所を発見することはできなかった。

スカイは今、北西部オハイオ発達センター（Northwest Ohio Developmental Center）にいる。スカイは自分の母親に何が起こったのか知っているだろうか、あるいは、なぜ母親が自分の人生の一部にもはや存在しないのか理解しているだろうかとビルは疑問に思った。補佐官によれば、スカイが「ママ死んだ」と幾度か言っていたそうである。スコットの三度目の施設訪問のとき、スカイは泣きそうになりながら「ママを叩かない」とか「スカイごめんママを叩いた」と何度も言っていた。ある日、スカイがスコットに「ママがほしい」と言ってきたので、スコットはスカイに「ママはきみのことをとても愛しているんだよ」と言った。

トルーディはケント州のスタンディングロック墓地に埋葬されている。トルーディの墓石には見開きの本が彫刻されていて、左側のページに「ママ／ガートルード・トルーディ・シュトイアナーゲル／一九四八年八月二五日／二〇〇九年二月六日」と記されている。向かい側のページには「息子／スカイA・ウォーカー／一九九〇年一一月一五日」と刻まれていて、いつかスカイがトルーディと共に眠る日のために空白が残されている（Connors 2009）。

2－2　トルーディとシンプリカンの面会

二〇〇六年二月にシンプリカンは、博士課程進学に向けての大学訪問のためケント州立大学を訪れ、トルーディとスカイに面会している。シンプリカンの修士論文は、自身の自閉症の弟をめぐる正義について書いていたものだった。トルーディとシンプリカンは、自閉症、愛、暴力について議論した。自閉症の青年や子どもたちの五〇％以上が攻撃的な振る舞いを表わすことが研究で示されていること、この攻撃性は親にとって最大のストレスになることを二人は知っていた。

奇妙なことに、トルーディとシンプリカンは、自分がもう少しで息子や弟から致命傷を負わされそうになった話を笑いながら交し合った。シンプリカンは、スカイが激しい怒りをトルーディに向けている話をここで聞くことになる。スカイはトルーディを追いかけまわし、ドアを引きはがすので、トルーディは身を守るためにクローゼットのなかに閉じこもることを強いられていた。しかし、トルーディの話は、スカイの暴力が和らいでいるような印象を与えた。トルーディはスカイを専門家のもとへ連れて行き、スカイの振る舞いを制御する薬をもらっていた。難問に直面していたにもかかわらず、トルーディとスカイは共に幸せに暮らしているのだとシンプリカンは思った。

その三年後、トルーディは殴られ、意識不明で、ほとんど息をしていない状況で台所にて発見され、スカイは地下室に返り血を浴びたパジャマ姿で発見された（Simplican 2015）。

3　ケアの倫理の理想化批判

『愛の労働』の著者エヴァ・キティの論じる依存者とは、「自力で生きていくのに必須な能力を欠く」（Kittay 1999, p.46）という最も極端で狭義な依存状態にある者を意味する。キティは、そのような依存者の世話をする任務を依存労働と名づけ、依存労働者にケアしてもらわなければ健康や生命が危ぶまれるような存在者を被保護者と呼ぶ（ibid., p.38）。そして、特に重度の障害を生涯にわたって抱える者のように、生涯一方的に依存する存在者も一人格として認め、他者に働きかける能力のある者と

して尊重するケアの倫理を導き出していく。

キティによれば、ケアの倫理は「すべてを包摂しようとする実際の語りやケアの実践に特に責任がある」（Kittay 2009, 122）ため、非‐理想化理論という特徴をもっている。しかし、キティは抽象化を避ける限りでは理想論ではないが、一部の関係性を主流から排斥することで、人間の性質を理想化していると批判されている。たとえば、女性同士の発展場の調査から現れてくる視点から見れば、多くのケア論者たちが、個人の関係性を浄化し理想化することで規範的ケアを形成していることや、このような規範的ケアに当てはまらない非規範的なケアが存在していることが分かる（Cooper 2007）。また、共依存という視点から捉え返してみると、ケアの倫理は、人間関係の闇の側面を排除した道徳的理想のみから現実世界の関係性を語っており、心理的に依存し続ける成人や、そのような成人同士からなる依存関係を不可視化している（小西 二〇一六）。このように、ケアの倫理が規範や理想を形成してきたことが、その規範の外に存在する視点から見ることで明らかになる。以下では、トルーディ事例にキティのケアの倫理を応用したときに生じる、ケアの倫理の理想化にかんする三つの問題点を論じることで、トルーディへ向けられがちな批判の不適切さを示す。

3‐1　攻撃的な依存者の不可視化

キティの依存への関心は、ケアの倫理に対する知的な興味からだけではなく、重い知的障害と発達障害がある娘セーシャをケアした経験から生まれた。知的生活に打ち込むことを大切にしていたキティは、こうした部分を持たない娘をどうやって育てるのか不安に感じたが、セーシャを手放したり、施設に送ったり、最愛の子どもという言葉以外で彼女のことを思ったりすることなど一度も思い浮かばなかったとキティは述べる。

セーシャはとてもヴァルネラブルな存在だった。世間の嘲笑から、危険から、無関心から、そしてセーシャの人間性に対する無理解から彼女を守るには、私たちの手厚い保護と愛が必要だった。私たちは、セーシャがどれほどのことを教えてくれるのかということには、まだ気づいていなかったけれど、何かを学んでいるということはすでにわかっていた。それは、私たちが価値のあると信じていたもの、私たち――私――が人間性の中心にあると思っていたもの、すなわち、思考や理性の能力なんかではなかった。そんなものでは、決してなかった（Kittya 1999, p.150）。

キティは、セーシャが愛と幸福の能力をもっており、それは人間として一番大切な才能だと語る。その才能のおかげで、セーシャをケアする人たちは、セーシャの依存が一方的なものであるにもかかわらず、彼女に対して深く、変わらぬ愛情を注ぐことができる。「愛こそが、セーシャが受け取りたいと願うものであり、お返しとして与えるものなのだ」（ibid., p.152）。このようにキティはセーシャの愛の能力を描き、セーシャに教えられたものについて示すことで、従来の障害者に対するスティグマ――特に知的障害者を人格として見なさないような見解――に抗っているのである。

しかし皮肉にも、そのような理論によってこそ、ケアの実践にしばしば現れてくるにもかかわらず、キティの構想する世界に現れることができず、さらにはその構想を脅かす存在が生じてしまう。それは攻撃性をともなう被保護者の存在である。シンプリカンは、「キティのケアの倫理は障害のある依存者を、愛らしく、ヴァルネラブルで、無力な存在とし

て理論化」（Simplican 2015, p.222）しており、「障害をもつ依存者がヴァルネラブルかつ攻撃的であるかもしれない可能性を無視している」（ibid., p.217）と批判した。このような記述は、愛すべきケアの経験のみを描写することでケアする人と依存者の毎日のもがき・奮闘を不明瞭にする（ibid., p.220）。攻撃性をともなう依存者のケアに従事している人びとは、ヴァルネラビリティとしての依存のモデルに反して、複雑な依存（complex dependency）を経験しているのである（ibid., p.224）。従来のケアの倫理は、複雑な依存を不可視化することによってこそ成立しているところがあるため、トルーディとスカイの事件はキティのケアの倫理のなかに一切位置づくことができないのである。

3－2　透明な自己の不可能性

キティによれば、依存労働では、「自己をつうじて他者のニーズに気づき、自分自身のニーズを読み取ろうとするときに、まずは他者のニーズを考えるような自己」（Kittay 1999, p.51）である「透明な自己（transparent self）」が求められる。透明な自己とは、「その性格抜きには、依存労働者が依存労働者たり得ないような究極的な理念」であり、「依存労働と呼んだ労働に不可欠の理念」（ibid., p.52）である。

この透明な自己の理論には、自己のニーズと他者のニーズを完全に異なるものと理解するような自己の理想化が存在する。シロ・ホイットニーは、「どのような関心が、被保護者だけの関心なのか？」（Whitney 2011, 564）と問う。「依存関係が、ケア、関心、感情的なつながりのいずれかである限り、その関係と関連するニーズと願望は、「私たち」に属するものであり、その関係は自己でも他者でもなく、両者がつながっている第三のものである」（ibid., 654-565）。依存労働者の自分自身と被保護者自身の関心を分割する能力は、依存労働者と被保護者のあいだでいかに関心が重複し食い込んでいくのかということを無視している。そのような理論は、人間として認められていないような存在を人間化しようとする過程で、依存労働者に対して理想的な自己を押しつけ、「理想化された自己に従わない個人を締め出し、オルタナティブなケアの経験を覆い隠してしまう」（Simplican 2015, p.223）。透明な自己が自明なものだと考えられることで、トルーディは自らとスカイのあいだにある境界線を見失い、スカイに没入していると批判されることになってしまう。

また、キティは、トルーディとスカイの事件の問題は、トルーディが、彼女が必要とするサポートを得なかったことだと指摘する。特にキャロル・ギリガンのケアの倫理に顕著に示されていることであるが、ケアの倫理では他者へのケアだけでなく、自己をもケアすることができる個人への成長が求められる（Gilligan 1982）。トルーディは手紙に、自分がスカイによって致命傷を負わされたとしても「私のせいであり、スカイのせいではありません。……私たちはみな、スカイを助けることに失敗したのです」と言っている。この記述から、トルーディはスカイのケアばかり考えていて、自分自身のケアについて考えていなかったとキティは指摘している（Kittay 2018b）。

しかし、透明な自己への批判を考慮し、トルーディとスカイの関係性を見つめるならば、トルーディを救うことがスカイを救うことと地続きになっていることが分かる。言いかえれば、スカイが住みやすい場所で暮らすということがトルーディにとっての関心とつながっているため、その部分が満たされなければトルーディを救うことができなかったということである。事例の詳細から明らかなように、トルーディはスカイを施設に入れることだけは完全に拒否しており、その願いをもったためにトルーディはスカイと二人で孤立してしまった。トルーディがすでに亡くなってしまっている以上、施設を介さない仕方やケアが提供されなけ

れば、トルーディを助けることはできなかったと考えるべきだろう。

3－3　「過剰なケア」への批判

キテイは、ケアしすぎること（caring too much）はまったくケアができていないことであり、不徳であると主張する（Kittay 2018a）。通常、Aが徳に値するものであった場合、A「すぎる（too）」という言葉は、A以外の他の徳に失敗しているということを意味する。たとえば「正直すぎる」ということは、正直でいることには成功しているが、その他の徳、例えば思慮分別に失敗している。しかし、「ケアしすぎる」ということは、それに類するものではない。

> ケアリングのポイントは、ケアされる人に利益をもたらすことであるが、ケアされていると思われる人が、ケアする人がケアしすぎていると言うとき、ケアする人が与えていると思っている恩恵は、まったく恩恵ではない。つまり、「ケアしすぎる」人は、ケアの意義を満たすことに失敗している。多くのケアするための意志がケアする人を動機づけるとしても、ケアが完全に規範的な意味で使われているとき、ケアしすぎることは、まったくケアできていないことである（Kittay, 2018a）。

ここで描かれているのは、ケアされる人がケアする人のケアを評価するような場面であるが、第三者も同様の観点からケアする人のケアを評価することが頻繁に生じている。トルーディ事例において、周りの人びとがトルーディにスカイを施設に入れることを何度も勧めていたことからも明白ではあるが、被保護者が攻撃性をもっている場合や、病のための行動が予測不可能なものだと考えられる場合は、施設収容や専門病院への入院の対象となる。トルーディが亡くなった後にも、トルーディはスカイを施設に入れるように然るべき場所に要請するべきだったとケースワーカーに語られるほどである（Connors 2009）。

攻撃性をともなう危険な存在は、家族のケアから切り離し、施設に収容することが求められてきた圧倒的な傾向性がある。現在、日本でも脱精神病院化や地域移行支援の必要性が唱えられているが、その実現困難性を問う以前として、そこで対象となっているのは、入院の必要がありつつも「不当」に入院させられてきた患者であることが圧倒的多数であろう（古屋二〇一五）。攻撃性をともなう依存者が収容の対象になるのは、家族や地域の秩序・安全な暮らしを守るという目的がある。

しかし、攻撃性をともなう家族メンバーをケアすることから解放されるのを望むのではなく、自ら進んでケアすることを望んでいる人が事実として存在する。それはもしかしたら、家父長的で抑圧的な義務感を反映したものかもしれないが、トルーディ事例のように（一部女性特有の問題が関係しているとはいえ）それだけでは説明できないような事態がある。攻撃性をともなう依存者に対し、「自らの人生（時に生命）を犠牲にするほどにケアすることを望み……施設に入れることを拒絶する者は、自らの安全確保を放棄しており、自己犠牲を伴う過剰なケアを行う者として問題視され得るだろう」（小西二〇一九、二四頁）。

攻撃性をともなう依存者を施設に入れず、自分の限界を越えて「ケアしすぎた」トルーディは、「過剰なケア」を行い、ケアそのものに失敗した存在として解釈されてしまう。確かにトルーディはスカイのケアに専心していたかもしれないし、それが彼女の死を引き起こしたことは否定できない。しかし、トルーディを病的で過保護な母親と見なすまなざしからは、彼女が何に奮闘していたのかまったく見えてこない。そうではなくて、トルーディがスカイのような依存者を救うには何が必要である

か全力で考えた軌跡を追うべきではないか。トルーディには、「スカイといっしょに暮らすか、スカイを施設に入れるか」という二つの選択肢しかなかった（Simplican 2015, p.221）。その選択肢以外を欲する存在を異端視せず、そのような存在と向き合うことが求められている。

4　トルーディ・シュトイアナーゲルは何を残したのか

4－1　シュトイアナーゲルの論文

トルーディ・シュトイアナーゲルは、二〇〇五年に出版された論文「自閉症スペクトラム障害と特定された症例の増加：政策的影響」にて、アメリカの自閉症政策について論じ、その政策への貢献を目指している。[③] 以下では、トルーディ事例と照らし合わせるにおいて重要な点について指摘する。

まず、シュトイアナーゲルは、障害学における二つのモデル、すなわち、障害の原因を個人のインペアメント（impairment）に見いだし、それを治療することに重点をおく医療モデルと、インペアメントをもつ人びとは社会によって無能力にされているためディスアビリティ（disability）は社会によって生み出されているとする社会モデルについて概観した。そのうえで、そもそも社会モデルは、医学研究を停止すべきと言っているわけではないことや、ヘルスケア、教育、職業訓練などの分野で専門知識をもつ人びとに役割がないと示唆しているわけではないことを確認している（Steuernagel 2005, p.140）。しかし、社会モデルにならって、自閉症自体が障害を引き起こす条件ではなく、社会が自閉症の人びとの障害を構築していると考えるならば、たとえば、自閉症を根絶するためよりも、自閉症児の特定の教育的ニーズを理解するために資源を費やすだろうと述べ、教育政策の不十分さを指摘している。社会モデルにならえば、自閉症は「治す（cure）」必要があるのではなく、社会が価値を認め、適応する必要がある異なる生き方であることを理解しなければならないのである（ibid., p.141）。

このようにシュトイアナーゲルは、社会モデルを推奨しているように見えるが、その問題点も指摘している。社会モデルは、障害のある人びとのエンパワーメントと、自分で話す権利を強調しているが、自閉症の人のなかには、自分で話すことができない人もいる。かりに政策立案者が、障害者の声に耳を傾け、そのための政策を制定したとしても、それは一部の声を発する能力のある人たちに応えたものであるにすぎず、そのことが皮肉にも自分たちのためのニーズを表明できない自閉症の人びとの問題を不注意にも排斥してしまうだろう（ibid. p.141）。このような指摘を行ったうえで、シュトイアナーゲルは、自閉症政策の将来に対する以下の見解を示している。

第一に、最良の情報が提供されることの重要性を主張している。たとえば、自閉症コミュニティの多くが製薬会社を批判しているにもかかわらず、「自閉症を治すわけではないが、攻撃性や強迫行動を含む自閉症の症状の治療において、一部の薬が効果的であるという証拠がある」（ibid., 144）。[④] そのような治療に対する適切な情報が提供されるべきであるし、さらに治療へのアクセスが制度として保証されていない現状も問題視されなければならない。

第二に、大学が教師を目指す人びとに訓練過程を提供し、学区が教師にインサービストレーニングを提供することの重要性を指摘している。この訓練は、自閉症児の学習スタイルと行動上の課題に焦点を当てる必要があり、特別支援教育を受けもつ教師だけでなくすべての教師に拡大すべきである。自閉症の子どもを通常学級で教育するようなインクルー

ジョン教育は、一部の人にとってはうまくいく措置であるが、教室内の教師が、これらの自閉症の生徒のための個別の教育計画を展開し、実行する準備をしない限り成功しない（ibid., 139）[5]。

第三に、学校卒業後の自閉症者へのサービスの必要性を訴えている。アメリカでは二〇〇五年現在かろうじて、学校システムをつうじて自閉症児へのサービスが提供されているが、その子どもたちが学校を卒業した後いかにしてサービスを提供するかという課題がある。したがって、自閉症の人と働く人びとに必要な専門的な訓練を含む、職業訓練サービスの受容能力を高めることに、より重点を置く必要がある（ibid., 139）。

シュトイアナーゲルは以下の言葉で論文を終えている。

> おそらく、最良の発展は、自閉症の理解を進展させ、それが医療モデルと社会モデルの両方によって通知されることである。自閉症と診断された子どもの親は、どの介入と治療を使用したいのか考えることができるし、公的資源と私的資源の組み合わせは、そのアクセスを保証することになる。同時に、社会は、自閉症の人を含むすべての人を受け入れる必要性を理解しはじめることになるだろう（ibid., 145：傍点は筆者による）。

4－2　トルーディの声

まず、トルーディは、スカイが居住施設ではなく、社会のなかで生きることを望んでいたことを確認したい。多くの人が、スカイには攻撃性があるため、スカイを施設に入れることが最良の解決策だと考えているが、トルーディがその考えをもつことはなかった。スカイのような攻撃性をともなう依存者が共存する社会がトルーディの生きた世界に存在しなかったため、彼女はそれに全力で抵抗したのである[6]。

とはいえ、トルーディはスカイの暴力を完全に許容しているわけではない。むしろ身をもってその危険を経験し、それだけは除去しなければならないものだと考えていた。だからこそ、社会モデルの考えにもとづき、自閉症を「治す」のではなく、社会全体で自閉症者の異なる生き方を理解すべきだということに賛同しつつも、医療に頼ることを否定しない。スカイの場合は攻撃性をともなう依存者であるため、共に過ごす人に危険が及ぶ。だからこそ施設が推奨されるわけだが、トルーディは自閉症の攻撃性に有効な薬が存在することを知った。論文から分かるように、社会モデルではどうにもならないところを、トルーディは有効な薬が見つかる可能性に賭けると同時に、自分と同じように苦しんでいたり、愛する子どもを施設に預けるしかないと考えたりしている親たちに、攻撃性をともなう自閉症者と共に暮らせる可能性があると伝える必要性を訴えたのである。

アイリーンの証言にあるように、トルーディは二〇〇三年には薬を試しはじめていたことを伝えており、亡くなる三年前の二〇〇六年のシンプリカンとの面会のときも、薬について触れている。トルーディの存命中にはスカイに合った薬を見つけることはできなかった。とはいえ、トルーディはスカイが社会で共存できるために、攻撃性＝暴力だけは取り除くべきだと考えており、そのための医療技術を求めたことは明らかである。それにもかかわらず、トルーディは一般的に言われているＤＶ構造に取り込まれた女性として解釈され、「加害者が変わることを信じている女性」としてありふれた仕方で描写されもしている。

さらにトルーディは、多くの人によって暴力をふるわれていることは知られており、トルーディが助けないしケアを求めたものかかわらず、誰も自分を助けることができなかったことを暴露しており、故意に暴力をふるったわけでもないスカイが罰せられるのはおかしいと訴えてい

る。二〇〇八年の三月に『ケント・ステイター』にスカイの暴力について記したのは、助けを求めているという意味も存分に込められていると考えられるが、同時に、いかに周囲（同僚やスカイの学校など）がスカイの暴力を知りながらもトルーディを助けることができなかったかを公表したようにも見受けられる。スカイを施設に入れない限り、トルーディは彼女の生を可能にするようなケアを受けられないような状態に追いやられていたのである。トルーディが残した手紙をスコットに読み上げたのも、二〇〇八年の春であることは偶然なのだろうか。

このように攻撃性への対処の必要性を認めたうえで、トルーディはスカイの社会的包摂のために必要な政策について考えている。スカイが小学生になったときに通常学級でなかなかうまくいかなかった経験から、学校の教師の教育を求め、制度が整っても、形だけでは社会的包摂は実現しないことを伝えている。さらには、もうすぐ学校を卒業することになるスカイの将来と関連して、学校卒業後の制度についても懸念を示している。トルーディの執筆した論文で書かれている制度の問題点や将来的な政策の展望の着想は、明らかにスカイとの経験を前提にして書かれたものである。この観点からみれば、トルーディが自らの人生を賭けていかに一貫して自閉症者の社会的包摂のために公私共々奮闘していたかは明らかであり、それに軽率な評価を与えることは彼女の尊厳を侮辱するという意味で重大な倫理的不正を犯すことだと考える。

トルーディの論文で提起されている教育や就労の問題点やそのための政策の提案は、明らかに昨今の発達障害者を包摂しようとする動き・政策と類似的である。その流れはときに、発達障害者を社会に「包摂する」のではなく、社会に合うように「矯正する」ものだと批判されるようなものでもある。確かにトルーディは、スカイが「普通」であることを求めていたと言えるかもしれない。スカイ自身がトルーディの選択をどのように受けとっていたかも定かではない。しかし、ここで重要なことは、トルーディの願いが「順当な」社会的包摂を目指すものであったにもかかわらず、スカイの攻撃性のため、その願いが「不適切さ」を帯びたものとして認識されがちであることだ。スカイのような存在を想定せずに、真の意味で「社会的包摂」が実現できると言えるだろうか。このような存在を度外視したうえでの「社会的包摂」が抱える問題は、「誰もがケアされ包摂される」ことを目指しているはずのケアの倫理が、その規範や理想を形成する過程で攻撃的な存在や病的な存在、規範の外の生を不可視化してしまっているという問題と類似的ではないだろうか。ケアの倫理理論とそこに含まれるイデオロギーを批判的に検討することで、現在「適切な・正しいケア」とされるものを再考する必要性が明らかになる。このように見ていくとトルーディの願いは社会全体の根本的変革を要請するものだということが分かってくる。

「トルーディは自己をケアできていない」とキテイは述べた。しかし、キテイはそれに続いて、トルーディの手紙の「私たちはみな、スカイを助けることに失敗したのです」という記述を「社会が彼女（トルーディ）とスカイを助けることに失敗したのです（The society has failed both her and Sky）」と言いかえるべきだと述べた（ibid.）。この論を進めるならば、社会がシュトイアナーゲル家以上にスカイが住みやすい場所・世界を作ることができなかったことによって、「スカイとトルーディを救うことに失敗した」と考えられる。それは、トルーディのあらゆる文書や言動が訴えていたことではないだろうか。アレンは、トルーディは自分がスカイに致命傷を負わされた場合、多くの人が自らをケアに失敗している悪い母親、スカイを自閉症モンスターだと捉えるだろうということを予期して、手紙を書いたと主張する。つまり、トルーディはこの事件の原因はそのようなものではなく、「自閉症の人びとが生き続ける可能性を否定

し、ケアのための社会的包摂の枠組みを否定する壊れたシステムの結果として」（Allen 2017, p.69）彼女の死を捉えるよう強く主張したのである。

トルーディが言いたかったことをケアの倫理の理想化に見られるような規範をもちこまずに検討し、世界を別のまなざしから見ることが重要なのだ。規範をもちこむとその外の声は聴きとれなくなる。トルーディが手紙を残し、エッセイを残し、論文も残してくれていたことで、彼女がその生を賭けた抵抗の声に、私たちは今、出会うことができる。しかし、多くの場合は、そのようなものは残らないだろうし、表に出てこないだろう。トルーディのような生が、単に病的なものとして捉えられることは頻繁に生じているだろう。トルーディの残した声は、そのような生を「異なるまなざし」から見ることやそのような生の「異なる声」に耳を傾けることの重要さも、私たちに訴えるものなのではないだろうか。

【注】

① このように母親のみがケアの担い手として病理化されていること、バウアーに見られるような自閉症児の暴力への恐怖に対する同調が多くの場合母親から投げかけられたこと、さらにトルーディ事例において息子よりも身体的な腕力を持たない母親のトルーディがシングルマザーとしてケア役割を背負うことになったことなど、トルーディ事例がケアをめぐるジェンダー問題を示唆しているのは明らかである。

② この事例においては、スカイの責任問題をいかにとらえるかという議論が生じることが予測される。しかし、本論文では、あくまでトルーディのまなざしから出発することで見えてくるものについて論じることにする。また、施設を擁護する見解や、施設によってこそ救われるケースについては、同様の理由から、本論文の論点とは別の問題である。

③ その他にも自閉症にかんするトルーディの共著論文が二本あった（Baker & Steurrnagel, 2009; 2013）。双方とも、中西部政治学会（Midwestern Political Science Association）の年次大会で発表した原稿を論文化したものだと思われる。二〇〇九年の論文は二〇〇六年の年次大会の発表と同タイトルで、トルーディはセカンドオーサーであり、二〇一三年の論文は二〇〇八年の年次大会の発表と同タイトルで、トルーディはファーストオーサーだった。しかし、二〇一三年の論文が完成する前にトルーディが亡くなってしまったため、この論文のファーストオーサーは共同発表者のベイカーになっており、トルーディが亡くなったことが著者説明に記されている。両論文とも、アメリカとカナダの自閉症政策ないしナラティブの比較検討を行ったものであり、トルーディが自閉症政策の好転を望んでいたことがさらに理解できる内容となっているだろう。しかし、本稿では、もっともトルーディの思想が垣間見えると思われる彼女の単著論文のみに焦点を当てた。

④ ここで参照されている文献・ウェブサイトは、Aman, Lam &Collier-Crespin, 2003; McCracken et al., 2002; “Newer Antipsychotic Medication,” 2002 である。なお、最後のウェブサイトは現在掲載されていない。

⑤ トルーディは州政府と州立大学が自閉症の生徒を受け持つ教師の訓練のためにいかに協力できるかの例として、二つのミシガン州のプログラム、自閉症提携的保証（Autism Collaborative Endorsement：ACE）と自閉症における学際的証書（Interdisciplinary Certificate in Autism）をあげている。

⑥ 『愛の労働』において、キティもセーシャを施設に預けることについて強烈な抵抗感を記している。一九七〇年代当時、多くの親が知的障害児を預けていたが、キティが公的施設に対してもっていたイメージは単なる廃棄場というものだった（Kittay 1999, pp.152-153）。現在でも、施設の虐待問題はひとつの大きな社会問題と認識されている。

【参考文献】

Aman, M. G., Lam, K. S. L., & Collier-Crespin, A., 2003, “Prevalence and Patterns of use of Psychoactive Medicines among Individuals with Autism in the Autism Society of Ohio,” *Journal of Autism and Developmental Disorders*, vol.33（5）.

Allen, Holly, 2017, “Bad Mothers and Monstrous Sons: Autistic Adults, Lifelong Dependency, and Sensationalized Narratives of Care,” *Journal of Medical Humanities*, vol.38（1）.

Bauer, Ann, 2009, “The monster inside my son,” *Salon*, March 26. https://www.salon.com/2009/03/26/bauer_autism/（二〇一九年九月一一日取得）。

Baker, Lee Dana & Steuernagel, Trudy, 2009, “Comparative Policy Entrepreneurship: The Case of Autism-Related Policy in North America,” *Journal of Comparative Policy Analysis*, vol.11（2）.

———2013, “Comparative Canadian and United States Autism: A Narrative Analysis,” *Review of Disability Studies: An International Journal*, vol.8（4）.

Cooper, Davina. 2007, “‘Well, you go there to get off’: Visiting feminist care ethics through a women’s bathhouse,” *Feminist Theory* 8（3）: 243-62.

Connors, Joanna. 2009, “Kent State professor Trudy Steuenagel’s fierce protection of her autistic son, Sky Walker, costs her life: Sheltering Sky,” *The Plain Dealer*, December 6. https://www.cleveland.com/metro/2009/12/kent_state_professor_trudy_ste.html （二〇一九年九月三〇日取得）。

Gilligan, Carol, 1982, *In a Different Voice: Psychological Theory and Women’s Development*, Harvard University Press（岩男寿美子監訳一九八六『もうひとつの声——男女の道徳観のちがいと女性のアイデンティティ』、川島書店）。

古屋龍太二〇一五『精神科病院脱施設化論——長期在院患者の歴史と現状、地域移行支援の理念と課題』批評社。

Kittay, Eva Feder, 1999, *Lover’s Labor: Essays on Women, Equality, Feminist Care Scholarship, and Beyond*, Routledge.

———2009, “The Ethics of Philosophizing: Ideal Theory and the Exclusion of People with Sever Cognitive Disabilities,” Tessman, Lisa（ed.）, *Feminist Ethics and Social and Political Philosophy: Theorizing the Non-ideal*, Springer.

———2018a, “Care and Disability for Submission for the Handbook”（a paper for the event: Intersections: Feminist Care Ethics & Disability Studies）.

———2018b, “Eva Kittay Respondents: Martin Leckey & Mariko Konishi, followed by Q&A,”（the event: Intersections: Feminist Care Ethics & Disability Studies）, https://soundcloud.com/philosophiesofdifference?fbclid=IwAR1yKtoWNinbTBiP1RSxOIIl2CbYHUwupFzu2Gj_-9W6rneyWLchxtkshSc（二〇一九年九月三〇日取得）。

小西真理子二〇一六「ケアの倫理に内在する自立主義——相互依存・依存・共依存の検討を通じて——」『倫理学年報』六五巻。

———二〇一九「「ケアする責任」と「ケアしない責任」——現代家族の「依存」に着目して」『現象学年報』三五巻。

McCracken, J. T., McGough, J., Shah, B., Cronin, P., Hong, D., Aman. M. G., et al, 2002, “Risperidone in Children with Autism and Serious Behavioral Problems,” *The New England Journal of Medicine*, vol.347.

Sangiacomo, Michael, 2009, “Kent State Prof Gertrude “Trudy” Steuernagel dies from beating injuries, son arrested,” *The Plain Dealer*, February 7. https://www.cleveland.com/metro/2009/02/kent_state_prof_gertrude_trudy.html（二〇一九年九月三〇日取得）。

Simplican, Stacy, 2015, “Care, Disability, and Violence: Theorizing Complex Dependency in Eva Kittay and Judith Butler,” *Hypatia*, vol.30（1）.

Steuernagel, Trudy, 2005, “Increases in Identified Cases of Autism Disorders,” *Journal of Disability Policy Studies*, vol.16（3）.

Whitney, Shiloh, 2011, “Dependency Relation,” *Hypatia*, vol.26（3）.

［付記］ 本研究は、JSPS科学研究費JP19K12922の助成を受けたものである。

［謝辞］谷徹先生とはじめてお会いしたのは、卒業論文の口頭試問のときでした。口頭試問のなかで谷先生は、私に大学院進学を進めてくださいました。私のような人間が大学院へ行ってもいいのかと大変驚いたのを覚えています。二年の社会人生活を経て、私は立命館大学大学院修士課程に進学しました。あの口頭試問で谷先生に出会わなかったら、私は研究者を目指していいのだという発想をもつことができなかったと思います。ありがとうございました。

（大阪大学大学院文学研究科講師）